

---

# 愛の意味

ミズキシホ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛の意味

### 【Zコード】

Z5584C

### 【作者名】

ミズキシホ

### 【あらすじ】

あなたは「愛」の意味を知っていますか……？

僕が彼女を初めて見たのは、  
いや、

その光景に初めて遭遇したのは、  
夕暮れ時の図書館でだった。

その日、

会社が休みだつた僕は、  
家でのんびりダラダラと過いりし、  
夕方になつてフラリと近所の小さな図書館へ出かけていった。

もう少しだけ足を伸ばすと、

最近できたばかりの近代的な図書館があるのだが、  
僕は近所のその小さな図書館が気に入っている。

その小さな古びた図書館の中は、  
一年中ひんやりとしていて、  
薄暗い。

そのせいか、

本も心なしか湿つぼくしつとりしている感じがする。

特に読みたい本があつたわけでもないので、  
内容も確かめず、

ただ表紙に惹かれただけの雑誌を手に取り、  
僕は奥の大テーブルへと進んでいった。

僕がこの図書館を好きなのは、  
この大テーブルがあるからだ。

この大テーブルの置いてあるこの部屋は、天井が高く、とても広く、僕はこの部屋へ入るといつも、まずは深呼吸をするのだった。薄暗さに、圧迫感を与えられることもなく、僕にとっては、とても居心地のいい空間だ。

僕がこの図書館を気に入っている理由はもうひとつある。それは、利用者が少ない、ということ。天井が高く広いその部屋の大テーブルに僕だけ、という日は少なくない。

でも、  
その日は、  
ひとり、  
女性の先客がいた。

何かの本を熱心に書き写している。

僕は、  
その女性から離れた端の方に座った。  
(だってテーブルは広いんだし、僕ら一人だけなのだから)

低めのゆつたりとした椅子に深々と腰掛け、静かに深呼吸をしながら、天井を見上げる。

黒々とした梁に歳月が感じられる。

そして、

ゆっくりと田の前の大テーブルに目を移す。  
天板が厚く、がっしりとしたテーブルだ。  
年月を経た光沢が僕を魅了する。

ひとしきりくつろいだとこりで、

僕は手にした雑誌を開いた。

特に読むでもなく、

ゆっくりとページをめくる。

ふと、

どこかで声が聞こえた気がして僕は顔を上げた。  
なんだろう。

気のせいかな。

その時また聞こえた。

あの女性だ。

何を言っているのかはここからでは聞き取れないし、  
実際、大きな声ではない。

ただ、

何かを絶え間なく呟いているのだ。

小声でずっとぶつぶつ言っているから耳についたのだ。いつ  
念佛か？ む経か？

そして、

相変わらず、

熱心に書き写している。

真剣そのものだ。

それにして熱心だな。  
なんて言つてゐるのかな。

しばし、ボンヤリと見つめてしまつて、  
我に返る。

ま、いつか。

さて、帰ろう。

僕はその女性を横目に見つつ、  
図書館を後にした。

翌週、  
僕は、

いそいそと図書館へ出かけた。

期待通り、

彼女はやはりそこにいて、  
やつぱり何かを呴きながら、  
熱心に書き写していた。

僕はパツと田に入った本を手に取ると、  
彼女の近くに座った。

本に視線を落とし、

読んでいるふりをしながら、

僕は彼女の動向に全神経を集中した。

「…た…が…も…い。」

彼女の呴きは、

小声なので途切れ途切れにしか聞き取れない。

熱心に書いているそれは何なのかなと、そーっと横目で観察してみる。

本をじっくりたっぷり見つめは、

少し書いては手を止め、本に目を移す。  
そして、たつぱりと見入ったあと、

もた書く。

僕はその動きを見て、

模写でもしているのかと思った。

が、違つた。

彼女は文字を、

『描いていたのだ。

文章をただ書き写すのではなく、文字ひとつひとつを丁寧に『描いて』いるのだ。

5センチ四方くらいの大きさで。

意表をつかれた。

彼女は熱心に描き続ける。

呪文をぶつぶつと呟きながら。

気がついたら僕は彼女に話しかけていた。

「ねえ？ キミ……」

彼女がゆっくりと顔をあげ、  
ゆっくりとこちらを見る。

ここ初めて僕は、  
彼女の顔を正面から見ることになる。  
熱心に描いている横顔の彼女の目は真剣で、  
表情は霸気に満ちていたが、  
真正面から見る彼女は、  
色白で儂げなひとだった。

僕の顔に焦点が合つと、  
ちょっと小首をかしげ、  
話しかけられたのは自分だろうか、という顔をした。  
急に眠りを妨げられた人のように、  
心ここにあらず、という感じだ。

「ねえ、キミ、

そんなに熱心に何の本を見ているの？」

まだボンヤリしたまま、  
彼女はまた少し首をかしげ、  
ゆつくりと本へと目を落とす。

そして、

そろそろと本へ手を伸ばし、  
ゆつくりと手に取ると、  
表紙をこちらへ向けて寄越した。

ミルトンの失楽園。

「へえ～。

それで、

なぜその本を書き写しているの?」

彼女は、

「え……?」

と言ったきり目を伏せてしばらく考えていたが、  
やがて目を上げると、  
また少し首をかしげて、  
「表紙が素敵だから……」  
と言つた。

「ふふ、そつか。

そしてキミは何をずっと呟いているの?」

すると、

彼女はいまやつと眠りから醒めたように、  
ハツとした顔をすると、即座に、  
「わたし、うるさかつたですか……?」

と僕にたずねる。

「いやいや、そんなんじゃないよ。

ただ、ずっと同じことを聞いてこないのでだから、

何の呪文かなあ、なんて

彼女は、

頭を伏せると、

すまなそう、

すみません……」

と言った。

「いやいや、かえって僕の方こそ」「めん。

変なことを聞いて。

つるすべもないし、

僕は全然気にしていないから、  
どうぞそのまま続けて。

「ごめんね」

「わたし……、

ゴシック体がきらいなんです……」

「え？」

「わたし……、

ゴシック体がきらいなんです……」

聞こえなかつたと思ったのか、  
彼女はもう一度同じことを言った。

「あ、いや、ちゃんと聞こえたんだけど……」「どうこう」とへ。

「『ゴシック体』がきらいなので、明朝体で書いているんですね……」

「『ゴシック体』が……。

ちょっと見せてもらつてもいいかな……？」

彼女の返事も待たず立ち上がると、僕は彼女のそばへ寄る。

そして、

彼女の傍らから、スケッチブックを覗き込んだ。

大きさがマチマチの文字がそのスケッチブック一杯に描かれていた。

それは……、

文字といつよりむしり、

ひとつのは「絵」のようだった。

そして、

その文字は、

いわゆる「明朝体」ともまた少し違っていて、その文字ひとつひとつが、美しかった。

僕は言葉もなくただその「絵」に見入っていた。

「…………あの…………」

「え？ ああ、ゴメン」

僕は、ほうっと大きく息を吐いた。

「キミ……、すじこね、これ。」

「……、キミ……」

僕は彼女の傍らの椅子に腰掛けた。

彼女は何も言わず、きこちなく微笑んでいる。

「でもなぜこういつのを描いていたの？」

僕はまた同じ質問をした。

彼女は、  
ゆっくりと首をかしげ、目を伏せると、  
「……表紙が素敵だから……」

と先ほどと同じ答えを呟いた。

「ふふふ、そつか。」

じゃあ、なぜ、ゴシック体がきらいなの？」

彼女はゆっくりと顔を上げ、  
何かを考えるように、  
視線を遠くへさまよわせた。

やがてまたゆっくりと僕へ視線を戻すと、  
「つまらないから……」

と答えた。

「つまらない? なるほどね。

僕も『シック体はきらこだよ

「きらい……?」

「うん」

「わうなんだ……」

と言ひと

彼女は一コラと嬉しそうに笑った。  
笑った彼女の顔はとても素敵だった。

ちょづどその時、

図書館の係員が閉館を告げに来た。

僕らは立ち上ると、  
連れ立つて図書館を出た。

「キリ、家はこのへんなの?」

「ハイ」

「僕もすぐ近くなんだ。  
送つていくよ」

「ありがとう」

道すがら、僕らはいろいろと話した。

といつても、

彼女はものすごく口数が少ないから、  
もっぱら僕が質問して、彼女がそれに答える、  
という感じだつたが。

彼女の家までの10分ほどの間に、

僕は、

彼女の名前が風子 フウコ といふこと、  
両親と一緒に暮らしていること、  
きょうだいはないこと、  
体が弱くて学校へはあまり行けなかつたこと、  
体が丈夫ではないので勤めには行つていないこと、  
いま24歳だということ、  
を知つた。

彼女の家の前に着き、

僕は最後の質問をした。

「来週も図書館へ行くの？」

フウコは微笑みながら黙つて頷いた。

「じゃあ、僕も行くよ」

フウコはニッコリと笑うと、  
また黙つて頷いた。

笑顔のフウコはやっぱり素敵だった。

このまま来週まで会えないのが寂しくて、

僕はフウコに携帯電話の番号を聞いた。

「必要がないから、持っていないの……」

フウコは申し訳なさそうに答えた。

「そつか、残念。

それじゃあ、また来週！」

軽く手を上げると、

僕はフウコに背を向けた。

少し歩いてから振り返ると、

フウコはまだ家の前で見送っていた。

僕はまた手を振った。

フウコも手を振り返してきた。

翌週、

また僕はいそいそと図書館へ向かつ。

この一週間、

どう過ごしてきたのかよく覚えていない。

とにかくこの日が待ち遠しくて仕方がなかつた。

フウコはもう来ていって、

相変わらず呪文を唱えながら「絵」を描いていた。

僕は本を一冊選ぶと、

彼女のそばへ行き、

その隣へ座つた。

「やあ、久しぶり

フウコは顔を上げるとニヤニヤと笑った。

僕らは閉館まで、  
ほとんど喋らず、  
それぞれの趣味に没頭した。

こうして、

僕とフウコは、毎週、図書館で会つようになった。

そんないつものよう、「ねえ、フウコ、僕の名前を描いてよ」と言つた。

フウコは手を止めると、怪訝な顔で僕を見る。

「名前を……？」

「うん。

そしてそれを僕にくれよ。

額に入れて部屋に飾るから

フウコはなぜか困惑した表情のまま黙つて僕の顔を見ている。

心なしか悲しげにさえ見える。

僕はおかまいなしに続けた。

「ね、描いてよ。

僕の名前は、

タカギ ゲン。

高い低いの高に、樹木の樹、ゲンは弦楽器の弦だよ

フウコは悲しげな瞳の色で僕の顔を見つめたまま鉛筆を差し出すと、  
スケッチブックの新しいページを差し出し、

「ここに書いてくれる……？」

と言った。

「どうしたの？ フウコ？」

「フウコ……？」

フウコは鉛筆とスケッチブックを差し出したまま、  
相変わらず悲しげに僕を見つめている。

アッ……！

僕は気付いた。

そうか、そうだったのか……！

フウコは字が……。

「ゴメン、フウコ、ごめんね……」

「いいの……」

フウコはふっと表情を和らげると微笑んだ。

「貸して。スケッチブックと鉛筆」

僕は、

スケッチブックと鉛筆を受け取ると、  
フウコがするように、  
明朝体で大きく「愛」と描くと、  
フウコの顔へ顔を寄せた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5584c/>

---

愛の意味

2010年10月10日22時53分発行